

ドクターに聞きました

薬剤性認知機能障害

認知症と想っていたら、いつも服用している薬が影響していた。あるいは、薬によって認知症の症状が悪化していた。ということがあります。複数の病院から処方を受けているあるいは、処方されている薬の数が多い場合は特に注意が必要です。

薬剤と認知機能障害

脳は神経細胞の塊です。神経細胞によって形成されているネットワークは、神経伝達物質によって正常な働きを保っています。神経伝達物質にはヒスタミン、アセチルコリン (ACh)、GABA、ドーパミン等多数の種類があります。「コリン」「ギャバ」等の単語はCMで耳にしたことがあると思います。心臓、胃腸、膀胱等、臓器の

機能を整えるために服用している薬剤の中には神経伝達物質の働きを抑えたり、増強することで効果を発揮しているものがあります。例えば、ヒスタミンの働きを抑える抗ヒスタミン剤は、アレルギーや皮膚掻痒感等の治療に用いられます。また、ヒスタミンを阻害することで胃酸の分泌を抑える薬は、胃潰瘍の治療薬として用いられています。アレルギーの薬には眠気の副作用があることは良く知られています。これは、薬によって脳の覚醒が妨げられ、意識障害（我々が毎日習慣としている「睡眠」とは「生理的な意識障害」です）を起している」と説明できます。脳が覚醒するためには、脳幹網様体（意識の中枢）でヒスタミンによる刺激が必要です。つまり、抗ヒスタミン薬を服用するこ

とで、正常な神経細胞の活動が過度に抑えられると、意識障害（眠気）を生じてしまっていると説明できます。神経伝達物質の中でもAChは最も重要で、正常な知的活動を保つ

主役です。AChの働きを抑える薬は「抗コリン薬」と言われ、様々な病気の治療に用いられています。しかし、抗コリン薬を連用（長期服用継続）している高齢者を調査すると、約7割の人に何らかの認知機能の影響が起っていると報告されています。抗コリン薬の副作用は、錯乱や記憶障害等の短期的な有害事象に関連しています。さらに、長期的にも認知症のリスクを増やすことが明らかになりました（JAMA Intern Med 2019）。

薬は諸刃の刃 かかりつけ薬局の 薬剤師に相談

「ものわすれ外来」では診断に際して先ず、服用している処方薬を確認させていただきます。受診の際には「お薬手帳」をご持参ください。しかし、個人で処方薬についての副作用等を調べることは難しいこともありますし、安易に薬の良し悪しを判断するのは危険です。メリット、デメリットについて良く理解したうえで上手に薬を利用する必要があります。先ずは、薬を処方して下さるかかりつけ医師によく相談しましょう。複数の病院から処方箋をもらっている場合等は、「かかりつけ薬局」を決めて薬剤師に相談する事も良い方法です。



たつのおとしご
クリニック 院長
小野 隆生 先生

経歴

- H2年 産業医科大学医学部卒業
- H9年 産業医科大学医学部
大学院医学研究科修了
- H11年 介護老人保健施設
正寿園 施設管理者
- H13年 たつのおとしごクリニッ
ク院長/介護老人保健
施設 正寿園 施設管理者
(併任)

特定社会福祉法人 年長者の里
たつのおとしご
クリニック
北九州市八幡東区大蔵3-2-1
TEL 093-652-5210